

持続可能な発展に向けて

○グループ 4

日隈、小出、松本、中村、中山、オルガ、佐原、齋藤、田中、山田、張ギ、張威、神田

(1)はじめに

我々は里山と貧困問題(途上国と日本)について焦点を当てた。それぞれについての議論を以下にまとめ、我々が伝えなければならないと感じるメッセージを残すものとする。

(2)里山～持続可能な循環型社会と里山～

里山の重要性は、その領域内で循環型社会が形成されていることにある。日本とジャワ島の里山について検証する。

まず、日本の里山の焼畑・炭と薪・落ち葉の循環システムと地産地消の効用を見ていく。土地を持続的に利用するために、土地を休ませながら作物を育てる(サイクルは30年間)焼畑のやり方は有効である。炭と薪は寒冷な地域の冬を越すために非常に大切な資源である。木が育つまでに生成されるO₂と、その木から作られた炭や薪を消費する時に生成されるCO₂とが同じ量だ。石油はCO₂を排出する一方、炭と薪のほうが環境にやさしい。そして落ち葉は栄養分として消費されるので、現在のようにゴミとして燃やされ、CO₂を排出しない。これらを活用した地産地消のシステムとは、その地域で生産された作物をその地域で消費し、利益がその地域内に還元されることで、その地域が発展するというもので、循環型社会を形成する効用を生み出す。

次にジャワ島の里山を見ていく。ジャワ島の人々はバナナリーフを大切な収入源としているが、過耕作によってその成長に必要な土壌肥沃度が低下している。村人もそれを認識しているが、その日その日の家族を養うのにも大変なため、長期的なスパンで考える余裕がない。それへの対策だが、基本方針として支援を受ける側を主体として援助していく。その土地にあった援助方法を共に模索する(他の地域で成功した手法をそのまま持ってきて失敗することが多いため)。必要なことは、①その地域が発展するために必要な情報の提供②土壌肥沃度の低下を防ぐために、バナナリーフの間に木や野菜、休閑地をつくることで地力の回復を計る③バナナリーフだけではなくて、様々な植物を育てることで生計の不安定さを解消すること(リスク回避)である。

以上みてきたように、自然と共生の伝統的システムを壊さず、里山の循環型社会を維持することは、短いスパンで見れば非効率的にみえるかも知れないが、自然環境を破壊せず、持続的に開発をするためには有用なシステムであると言える。

(3)貧困～途上国

次に貧困問題については、途上国におけるものと日本におけるものに分けて論じる。

まず、途上国の貧困だが、フィリピンの最貧層として、スモーキーマウンテン(膨大なゴミの山)の近隣に住む人々が挙げられる。彼ら/彼女らは、ゴミをあさって金目のものを探し、それを売ることによって日々をなんとか生き延びるという貧困かつ不衛生な生活をしている。特に子どもたちは、学校にも行かず毎日ゴミ山に行くことで家計の大きな支えとなっており、親も子どもにも教育を受けさせるよりも、子どもにゴミ山に行かせるという選択をする場合が多く見られる。こうした状況から、フィリピンのスモーキーマウンテンで働く子どもたちは、「貧困」、「無教育」、「不健康」の悪循環に陥っていると言えよう。

こうした問題を解決するための NGO などの活動も存在する。アジアのめぐまれない青少年への支援や日本の一般市民、とりわけ若い世代の人々への教育啓発を使命とした KnK（国境なき子どもたち）はこうした子どもたちや親に対する教育支援を行っている。

具体的な活動内容としては、まず、スモーキーマウンテンで働く子どもに対する奨学金や非公式教育の実施が挙げられる。また、それだけでなく、子どもを管理下に置く親に対しても教育の重要性を理解してもらうために、親に対する非公式教育を行っている。こうした非公式教育は、学校で行われる教育と異なり単位などは与えられないが、彼ら/彼女のために作られたしっかりとした特別なプログラムである。

実際の例を見てみよう。

マリーさん（仮名）は、弟が病気で、母親に言われて毎日スモーキーマウンテンに行き、家族の生活を支えていた。しかし、KnK の支援によって、勉強する機会を得ると、マリーさんは、弟の病気のために、スモーキーマウンテンでゴミを拾い日銭を稼ぐのではなく、病気を治せる看護師になりたいという夢を持つようになった。彼女は自分で自分の人生の目標を持ち、それに向かって努力することを、支援をきっかけとして自ら引き出したのである。一方で、彼女の母親も、KnK の教育を受けて、短期的な利益ということだけでなく、長期的なスパンで家族のことを考えるという視点を手にし、娘の夢を応援するようになった。

以上のことから言えることは、人々が陥っている悪循環を断ち切って全体的な生活の質の向上へとつなげるためには、次のような視点をういた支援が必要であるということに行き着いた。

すなわち、①自立をするための主体性を引き出すことによって、②自己選択可能性を拡大し、③目前の利益だけでなく、長いスパンでものごとを考えることができるようにするという価値観の転換、そのための教育支援の充実によって④好循環を生み出していくということである。

(4) 貧困～日本

日本の学生は『支援』という言葉から何を想像するだろう？インドのストリートチルドレン、東京の年配ホームレスの 2 者どちらかしか助けられない場合、多くはストリートチルドレン、つまり発展途上国の子供達を助ける事を選ぼうとする。我々はこの状況を疑問に思う。両者は択一的なものではないが、それを差し引いても我々は日本の貧困問題解決に貪欲でない。第 3 パートでは、その背景には身近な問題に対する関心度の低さと、共生の意識の欠如が現れているのではないかと問題提起する。

まず、支援が海外へ偏る背景として考えられることは①メディアの影響②海外支援への憧れ・ブーム③規模・深刻さの違い④ストリートチルドレン、の 4 つの認識がある。近年の海外支援はブームともいえる。開発系学部の設置・NGO 参加者・ボランティアの増加は、飢餓に苦しむ子供を救おうとする純粋な動機や、途上国に対して何かをしたい、と考える人々による行動の結果といえる。そしてそれを強調し広報するメディアの存在は継続した支援人口を生み出す循環を形成していると考えられる。貧困が及ぼす影響はアフリカに代表されるように死をもたらすほど大きい。その事実を踏襲すると途上国支援に猶予はなく、一刻を争うものである事は誰もが疑う余地がない。

それと比較して日本の貧困へのイメージだが、参画するにはネガティブなイメージが多い。まず、ホームレスに対する認識だが、多くは社会的に失敗した人達・努力しない人達・怠惰に生きた人達の結果がホームレスという認識が多数を占めていると思われる。自己責任論が支配する社会においては、彼らは援助

対象としては‘適さない’あるいは‘そもそも嫌’である。

しかし、これらも紛れもない『貧困』である。ホームレスも何故生み出されるのか？という問題を考える際、世代的再生産というスパイラルを忘れることは出来ない。代表的な例としては、親の教育不熱心から多くの選択可能性を得られず、社会に希望を持ってない事。例えば、貧乏人の子供は高い教育費がかかる日本においてはなかなか満足な教育が受けられず、貧困へ転落するケースも多い。このような人々が自立し、再起するサービスを提供する事は、我々の最も身近なことであるが故に大きな意義を持つ。なぜなら、我々もいつ、その状況に陥るかわからない社会であるからである。

我々の目指す社会像は NPO 等による生活援助、自立支援が日常的に行われ、共に生きる‘共生’の文化が根付く社会である。現在、Big issue・炊き出し・フードバンクといった NPO がこれらの活動を担い、更なる支援が求められている。例えば Big issue が目指すもの‘自立支援’の方法は、ホームレスのみが雑誌を売れるというもの。定価 300 円中、160 円がホームレスの収入となる。これにより、ホームレスが住居にすめるように促し、次に安定した就職へと繋げるシステムだ。炊き出しは協会や地域コミュニティが協力しあい行う。団体自体が援助を受けながら定期的に貧困者に食事を提供する。それだけでなく、同時に他団体(医療団体の検診・自立支援)を同時に行うことで、職業への斡旋を行う。ここに大きく関与するのが NPO フードバンクだ。賞味期限切れの食べ物・食用に耐えうる不良品を提供する契約を企業と NPO が結ぶ。企業にとっても貧困者にとっても Win-Win である事によって、持続可能な援助を可能としている。身の丈にあった身近な援助の一例だ。

以上から、我々は貧困をもう一度学びなおすべきだと思う。筆者は「君はどうして途上国支援なの？もっと身近な日本の格差問題はどうでもいいの？」と聞かれた際、明確な回答ができなかった。私も身近なものへの意識が低かったのである。貧困者は海外であれ、日本であれ、同じ人間である。それにも関わらず、海外ばかり重視し国内に目を向けない状態は、世界の貧困へアプローチしているとは言い難い。海外の援助は重要だ。しかし、身近にいる貧困者へ、真剣に目を向ける事は2つの意味を持つ。第1に、真に当事者のことを考えた支援を可能にする基礎となる事。第2に、我々を‘共生’の価値観へ導く事。それが出来たとき、日本(ローカル)から世界へ、世界の人々と共に生きる為の援助を実現できるものと信じている。

(5)おわりに

グループ4は自然環境・貧困について述べてきた。第1パートから第3パートに渡っての統一テーマは『現状を知る』。まず第1パートではジャワや里山を通して循環型社会が持続可能な社会であり、それには短期的な視野から長期的な視野へのパラダイム・シフトが必要だという事を知った。次に第2パートでは KnK の活動を通して、自立するための自主性・主体性を引き出し、選択可能性の幅を広げる教育の重要性和、価値観の転換を知った。そして第3パートでは我々が身近な援助に対する意識が軽薄である事を知り、共生と自立への道が身近な援助から学べ、国内にも目を向ける重要性を知った。

以上みてきたように、我々が最も伝えたいことは‘現状を知ること’だ。我々は現状を正しく知ることによって循環型社会が持続可能な社会を作り出すこと、価値観の転換、共生への可能性を感じる事が出来た。NGO や NPO に参加することだけが行動ではなく、これらの問題をそれぞれが普段の生活で意識し、身近な問題として受け止める事からはじめよう！！